

雑報

雑誌名	龍南會雑誌
巻	9 5
ページ	7 5 - 1 1 9
発行年	1902-11-20
その他の言語のタイトル	雑報
URL	http://hdl.handle.net/2298/5407

○祝天長節

秋漸く深く、金氣人に迫り、身心自ら清快を感ずるの時、微臣等茲に允文允武なる我が

今上天皇第五十一回の誕辰を奉祝すべき佳節に遭遇す。

伏して惟みるに、今上天皇神明の聖徳を以

て我が日東大帝國の祚を踐み給うて以來、茲に三十有五年、日尙は淺しと雖も、夙に皇澤洽霑にして四表に溢れ、稜威赫々として八荒に伸び、其の隆なる事正に天地に配し日月と并ぶ。殊

に微臣等過去一年間に於て、我帝國が天皇威靈の下、如何に世界の大舞臺に立ちて飛躍活動を試み、嶄然として東洋の天地に頭角を顯はし、正

義人道の燦然たる光彩を八紘に赫奕たらしめたるかを思ひ、又曩に 皇次孫御降誕の慶事あり、皇室の隆旺正に天壤と共に極りなきを思は

ば、本日佳節を祝するに際し、■特に情緒切々、

殆んど之が奉賀の詞と知らず。誠意誠心謹んで祝し奉る。

○第十二回開校紀念會

十月十日は來れり。よろこばしき哉。

十月十日は、わが第五高等學校が、呱呱の聲をあげたる日なり。

呱呱の聲をあげてより、時の大車輪は、めぐること既に十二。

十二歳の年月、長きには非ず。されど其草創時代を回想し、擴張、發展のさまを思ひ、以て現時の盛況を見るに、わが校の前途亦容易に測知する能はざるものあり。

吾人の胸中、先づ歡喜あり、感謝あり。

今年十月十日、例により滿校舉つて、開校第十二回紀念會を催す。

この日、空は名残なく晴れ渡りて、一點の雲翳をもとどめず。紅白の小旗は、竿頭高く掲げられて、ひら／＼と翻れり。

滿校七百の健兒、氣まづ昂る。弁前凱歌の雄嶺、

職員諸氏及び生徒一同式場に列す。

正面には、綴り合せたる筵に、はくちもてあしらひ、奇抜に紀念の二字を揮へる太額をかかけ、満場には、五色もて彩れる萬國の國旗を引はけたり。壇上の花瓶に亂挿したる秋の千草。左方の卓上には甲冑を飾り、右方の卓上には和洋の書籍を載せたり。文と武とを標章せるなり。

櫻井校長先づ勅語を捧讀せられ、次に校長の祝詞あり。次で職員總代兒島教授、生徒總代青木新氏祝詞を朗讀し、大學生、工學部卒業生諸氏の祝電、生徒の祝詩祝歌の披露あり。終りに生徒一同「阿蘇の峯より」を合唱せり。

之れにて式を終り、直に生徒の柔道に移る。

満場氷を打ちたるが如く寂然たる裡に、戸張師範と中光君との講道館流の形あり。その技、その術、進むも退くも、起るも仆るも、法あり、規あり。唯人をして嘆賞せしむるのみ。次で亂取に移る。虎奔龍嘯の勇を振ひ、術を盡し、力を角し、塵にまみれて苦闘したるは城、中光、寺島、宮本、熊澤、長原の諸氏なりき。

七十一

柔道の取組は喝采の裡に終り、次で擊劍の試合は喝采を以て迎へられぬ。

満場は色めけり。眞向に打下す太刀、憂止と受とむる太刀。荒鷲の姿、餓虎の勢。渡り合ふ太刀の音は、満場の静寂を破りて、一大活劇は演ぜられたり。勝敗左の如し

○(林) ○(竹田) ○(加藤) ○(黒田) ○(川井田)
赤峯 ×(鈴木) ○(鹽見) (大塚) ○(田島)

擊劍の試合終を告げたるは正に十一時半。來賓に午餐の饗あり

零時四十分、陸上運動に着手す。

小春の天地は、心地よき秋光を以て滿されぬ。

運動場には埒をしつらひ、埒外を以て一般來觀者の席とし、埒の一方には棧敷を設け、幔幕をめぐらし、來賓、婦人の來觀に供せり。

埒の一隅賞品授與所の中央、高く交叉せる國旗。紅白の條入りたる幔幕。風に翻る紅旗、白旗。

人の心は躍りるめぬ。

烟火は時々打揚げられて、美しき紫の雲を流し、樂隊は已に場の一隅に立ちて、曲を奏するめぬ。

。人はただ、今日の盛況を想見するのみ。
來賓席は滿たされぬ。婦人席もほゞ滿たされぬ。
。されど埒外には、疎なる人影をもて、一大圓
をつくられたるのみ。

鐘は亂打されて、人を招くに急なり。

突然、場の一隅まだ全く揃はざる生徒のたまり
に向つて、召集係は旗拾競走第一回と、聲高く
叫べり。競技は始まりぬ。

(旗拾) 紅き旗、白き旗、競技者は一心に美し
き旗の一行を見詰めぬ。固く握りしめたる拳を
わな／＼と震はせ、踏み出せる片足には、滿身
の力を籠めたり。砲聲一發、手近きよりどるも
の、遠きよりどるもの、足の運びは職るが如く、
取落して狼狽するもの、狼狽して躓くもの、息
喘れ、氣あせり、錯雜、混亂。一發の砲聲は競
技者の耳を驚かしぬ。勝敗已に決せるなり。亂
れに亂れ合ひたる紅と、白とは、やがてもどの如
く收まりぬ。

第一回 1 興田 2 小畑 3 樋口
第二回 1 大野 2 石河 3 園

(戴囊) 人と人とせり合ひ、踏み出すと一歩に
して落すあり。二三歩にして落すあり。頭より
額、額より鼻、鼻より顙、やがて支那得ずして
落すあり。五分刈の髪を、囊の織目にくわせて、
得意に手放して走り行くあり。綿帽子の如き、
海軍の禮帽の如き、小豆袋は人様々にされて、
埒のまわりを走りゆく。

第一回 1 興田 2 〇 〇 3 〇 〇 4 市川
第二回 1 西田 2 飯田 3 高山
第三回 1 惠利 2 川井田 3 松村 4 荒尾

(提灯) 僥倖を望む人は、集つてスタートの上
に立てり。合圖の砲聲に一散に駆け出すこと半
圓、競技者はさながら器械仕掛の如く、一齊に
提灯の前に屈みぬ。日暮れて山路を辿る心細き
旅人。警察署に急報を傳ふる人。何れもただ已
が提灯を後生大事にまもりゆく。獨り取殘され
て、幾度か風に吹き消されつゝ、走りゆく人を見
遣りながら、氣をいらだつもあり。

第一回 1 山下 2 古庄 3 湯淺
第二回 1 武田 2 島田 3 西村
第三回 1 興田 2 三河内 3 河野

番外 1 石河 2 平井 3 本田

この時、婦人席は衣香釵影已に余地なく、北部小學校、黒髮小學校、熊本小學校、工業學校、商業學校、熊本中學校、中學濟々費、幼年學校の生徒も亦定めの場所につけり。

麥藁帽、蝙蝠傘、市内より、市外より、思ひ／＼に集り來りて、埒外一圓踵をつき、袖をつらぬ。笑聲、喝采、又今迄の觀にあらず。

(二百二十碼) 強軀健脚の人たゞ韋駄天走りに走る。疾風沙を揚げて過ぐるにも似たるかな。埒内を一周すれば勝敗は瞬時に決するなり。

第一回 1 曾根 2 平井 3 河口

第二回 1 田嶋 2 大野 3 國武

(盲目) 數多の盲人は一線の上に整列せり。廻れ右、左向け左、斜に右。たゞ操人形の如く操られ、號砲に駈け出しぬ。反對の方向に走るが如き、迂濶なる男はなけれど、右に、左に、駈け違ひ、衝き當り、跪き、腹這ふ。駈出すと十數歩にして一轉、二轉、芝生を轉けまわりて、尙芋を拾はざるあり。行き過ぎて審判係につき當

り、追返さるゝあり。

七十六

1 渡邊 2 久保 3 中島

(二人三脚) 四脚の人を以て三脚の人をつくる。肥へたる人ど、痠せたる人。黒き毛脛ど、白き脛ど縛り合はせたるなど、配合極めて妙。手を組み、步調合せて走りゆく。中には障害物の柱に二人の間を裂れ、相見て苦笑せるあり。步調合はずして、一方已に倒れたるに心付かず、駈け行かんとあせるものあり。好箇のボンチ畫。

1 (川崎) 2 (美濃部) 3 (高田)

障害物の競技者はスタートに整列せり。其間に巾飛の競技は行はれぬ。

(巾飛) 巾廣く飛びたるを勝とす。

1 平林(一五、四) 2 高橋(五、一)

(障害物第一回) スタートを發足したる競技者は、暫くして第一の難關を過ぎざる可からず。木を横に打渡してしつらはれたる棚の、數間ばかりなるを、たゞ其健腕を頼みに、全身を吊したるまゝ、此方より彼方に渡り行かざる可から

す。幸うして之を逃ぐれば、への字形をなせる梯子の勾配急なるがあり。引張れる網の、急ぎてくぐらんとすれば、頭は網目より漏れ、足は繩にかゝりて身の自由を奪ふあり。次で宙に吊したる酒樽を抜けざる可からず。譬へば枯枝にぶら下れる簑蟲の如く、頭と足とを出して、喜劇を演ずる人もあり。見事に酒樽を抜ければ、縦横に引はれたる繩ありて、競技者の進路を妨ぐ。網にかゝれる兎の儘、足をどられて這々の体にて駆け付ければ、一發の砲聲。

第一画 1 中島 2 山崎 3 河野

(母衣曳) 走れば風になびく母衣の幾流れ。先だつ人の母衣に巻き込まれて、無理に決勝線に引入れられ、白の小旗をもちうも可笑し。

1 惠利 2 竹中 3 加藤

(竿飛) 走りかゝりに、手にせる竿の一端を地につくるよと見るまに、競技者の体はヒラリと高く中空に躍り、颯然、觸るれば落つる索を軽く越えて、身は何時しか地上にあり。高サ次第に増して七尺八寸五分となりぬ。彌次連の企て

得べきところを弄す。

1 久木山 2 藤尾

(四百四十碼) 埒内二周の徒歩競走。眞面目なる、最も實力を要するもの。

第一回 1 石河 2 高田 3 大野

第二回 1 小畑 2 黒江 3 奥名

(小學校) 小さな胸に、勝利の光榮を書きつゝ、二十人、三十人、群れ合ひつゝ、押し合ひつゝ、走り出す。小さな生徒の捷きは勇ましく、可愛きも、稍大なるがかへり見がちに駆けゆく、面憎し。

一、本田(黒) 吉村(北) 梅田(黒) 龜井(黒) 藤木(北)
二、渡邊(熊) 松村(北) 米村(北) 石崎(黒) 西島(黒)
三、加藤(北) 平井(北) 遠山(北) 矢津(北) 中島(北)
注意。黒：黒髪校。北：北部校。熊：熊本校。

(擬馬) 來賓婦人席より、美々しき御曹司を連れ來りて跨らせ、六脚の馬は驀地にかけ出す。白銀の轡ならねど、ハンケチくわへたる駿馬の、主諸共に眞逆さまに倒れ、かけくる馬の又るれに倒れ重なるに、先づ膽を冷す。

1 神谷(川井田)
美濃部

2 富田(加藤)
武藤

(傳令競走) 紅白の兩軍、北と南とに分れてスタートの上に陣し、各一名の傳令使を派し、埒内を半周せしむれば、本營より命令を書せる紙片を與へらる。傳令使走せ歸りて復命すれば、本軍は命せらるゝ儘に、二人三脚、戴囊、徒歩競走などをなして本營に至る。最も迅速に傳令の任務を全うせしは南軍(紅)なりき。

(附屬小學校) 番外に同校生徒の徒歩競走行はれたり

1 湯川 2 福田 3 竹原 4 北原

(分間競走) 距離を以てせず、時間を以て勝敗を決するなり。スタートを發して一分時。最も速きは殆んど四百碼を走りぬ。

1 高田 2 竹永 3 河口

(サック、レース) 頭のみ出し全身を褐色のザックに入れたる儘、スタートに俯けなりに横はる。合圖の號砲に皆起上りて蝗の如く、バッタの如く旗を目的に駆け出す。倒れてもかくは蛆蟲の如く、もがかぬは薩摩芋にも似たり。奇々妙々。

1 村井 2 原富 3 西村

(擔架競走) 擔げるは大兵の男、擔がれたるは年少の稚兒。埒内を半周して皆止まる。命によりて綱帶せんとなり。腕を綱帶されたるものあり。脛をされたるものあり。小さき病兵は綱帶されたるまゝ、咄嗟の間に決勝線に擔ぎ込まれたり。

1 武藤(松尾中光) 2 今川(西村本田) 3 神谷(小畑榮地)

(障害物第二、三回) 極めて困難なる障害物競走は、更に二たび繰返されたり。

第二回 1 石河 2 竹中 3 長松

第三回 1 平林 2 原 3 酒井

(商工學校) 四百四十碼の徒歩競走。競技者は商、工、兩校の撰手。一等二等共に商業學校に占めらる。

1 安武(商) 2 荒木(商) 3 佐藤(工)

(中學師範校) 濟々疊は早くより英氣を養ひ居たりしと聞えしが、一等は果してろの手に落たり。熊本中學に勝を占めたる者なかりしは氣の毒なりき。

1 富本(濟) 2 高本(師) 3 藤本(師) 4 緒方(師)

(盲馬) 一人は盲馬となり、一人は馭者とあり、前方に列べたる旗を廻りて、元の位置にかへらざる可からず。馭する人、馭せらるゝ人、共に氣が利かざれば失敗す。

1 (坂田) 2 (築地)

(職員競走) 戴囊競走なりき。有髻の人、無髻の人、人後に落ざらんとを願ひ、囊の落ざらんとを祈り、仰けるまゝ、俯けるまゝ、ひた走り走る。優勢なりし武藤教授、決勝線に達せんとして田川教授に先を越さる。

1 田川教授 2 武藤教授 3 小島教授 4 中島氏 5 早崎教授
(來賓競走) 同じく戴囊競走なりき。始めは僅かに四人。已にして一人加はり、二人加はり、又一人の碧眼の人を得て、二層の異觀を呈せり。短き人と、長き人との競走。囊は頭上にの儘疾風の如く決勝線に駆け入り、喝采を博したるはこの人。

1 マルチン氏 2 野口氏 3 村角氏 4 角樋氏

(小使炊夫競走) 四百四十碼の徒歩競走。

1 村山 2 高瀬 3 小林 4 須田

(委員競走) 不得要領の裡に始めの競技を終りぬ。審判官は勝敗を判する能はず。競技者自身又誰の勝に属したるやを知らず。一同呆然。改めて戴囊競走をなす。

1 山下 2 石井 3 黒川

(八百八十碼) 埒内を四周すれば八百八十碼なり。初めに全力を注げば、最後に敵に打ち勝たる。初めは緩やかに走り、最後の一周にへびかけ、敵の疲れに乗じて奮進すれば、一躍して喝采を博すべし。前者は長途競走に適せざる人、後者は掛引を吞込める人。兎に角、よく駆け、よく耐へざる可からず。

1 石河 2 高田 3 田島 4 加藤 5 元松

(撰手競走) 各級各組の撰手は、重き責任を双肩に擔ひて、スタートに整列せり。四百四十碼の競走をなさんどてなり。轟然一發の砲聲は耳朶を破れり。撰手は一齊に駆け出せり。優勝旗は果して誰が手にか落つ。已にして一周。埒の周圍は俄かに動き合ひ、崩れ合ひ、聲援の聲盛んに起る。已にして二周。勝敗は決しぬ。樂隊

は俄かに曲を奏しうめぬ。三部一年向山美弘の名は拍手喝采の裡に迎へられぬ。

競技は終りぬ。人波は破れぬ。

櫻井會長は、悠然として進み出で、場の中央、一段高きところに登らる。職員生徒は、その周圍を繞らせり。

天皇陛下萬歲！

會長の發聲につれて一齊に叫びぬ。龍田の山もどよまんなばかり。續いて

第五高等學校萬歲！

龍南會萬歲！

萬歳の聲は、穏やかなる空に、淀みをつくりてたゆたひぬ。打ち振る帽は秋の入日をうけて光はチラ／＼。

たのしかりし第十二回紀念會は、こゝに全く終りを告げぬ。

正に午後五時。

○弓術部秋期大會

秋まさに酣なる時、我部は十月二十五日を卜し

て、秋期大會を舉げぬ。東師範を始め來賓には島野教官、富田、大槻、八木、田園、市原等の老練家あり。加ふるに中學の健兒十余人の來會あり、總數五十余人、未曾有の盛會を以て、午後一時式を始めぬ、先づ五色の的はかけられたり。人は皆我こそ今日の盛會に高名せなむと、光榮を胸に描きて、待ちかまへたり。台矢は振られ射手は立てり。第二陣に高森君が金的の真中を射ぬきて、平素の手並を見せんと、切つて放ちたる矢は、白的の上縁に音のみ立てぬ。立ち代り、入り代り、或は遠矢、或は近矢を射たりしが五的は依然たり。

第九番目に立ちたる新部員の勇者、村川君黑的を見事に射貫きたり。村川君に次で左の諸君は同じく的を見事に射落しぬ。

(黒)村川君 (赤)國武靜君 (白)國武君

(金)稻津君 (青)坂本君

賞品授與終りて、次は七寸小的の競射となれり、矢數はいつも五立なれど、今日は來會者の多數なると、時間の都合により、三立となしぬ。

其結果は次の如し。一等市原君(三分)。二等有田(三分)。三等島野敦富(三分)。四等小笠原(二分)。五等大槻君(二分)。六等中村(二分)。七等富田君(二分)。八等竹中(二分)。九等奥川(二分)。十等稻津(二分)。十一等宮原(二分)。十二等値賀(二分)。十三等林(二分)。十四等坂本君(一分)。十五等高森(一分)。十六等村川(一分)。午後五時二十分閉會を告げぬ。

○柔道部秋季大會記事

十一月一日、正午少し過に開會した。當日は雨天であつたけれども、觀者瑞邦館に溢るゝ計りで、本日の活劇を想見するに十分であつた。殊に武藤柔道部長。兒島教授の來會を多謝するのである。

審判戸張師範

紅軍 白軍 岡部—寺澤、岡部の小冠者、先岡部 寺澤 頭第一に紅軍の先驅としての横田 森丘 必死の働きに、肝を砕かれて横田 山田 か、寺澤は終始防禦に力めた古屋 山田 が、その直角的の腰付には余

古屋	小穴	り感心が出来なかつた。其結果
江副	大村	分とは無理もない事だ。
江副	富松	横田—森丘、互角の体格であつた
日田	富松	が、惜む可し、鍛鍊日尙は淺きが爲
原口	富松	め、双方業ありしも一も成功する
柳	富松	ことなく横田の四方固で勝。
柳	市川	横田—山田、戦術に盡きたるか、絞
柳	松本	め合いのはては、双方共に力衰へ
野村	松本	てしまつた刹那。機敏なる山田の
野村	中川	大外刈は十分であつた。
渡瀬	中川	古屋—山田、戦友の仇思ひ知れど
松元	中川	獅子奮迅の勢凄じく、飛鳥の如き
隅田	中川	古屋の働きに、山田の勇氣は衰へ
原正	中川	ねど、業の優れるに途方を失ひた
原正	東野	る時、古屋すかさず十字絞を試み
黒瀬	福富	たがうまく成功した。拍手。この人
黒瀬	吉川	は他流の稽古が積んで居るらしい
黒瀬	柴田	古屋—小穴。激しき大亂舞。敵を倒
齊藤	柴田	さんと寢業に力ひる古屋、おのれ
小幡	柴田	其手には乗らぬぞと横捨身に總身

小幡 廣田 の汗を絞りし小穴、活劇八分。

八尋 廣田 引分。

寺田 廣田 江副。大村。兩士どもに巧な

寺田 松尾 る手足の働き、申分はなかつた。江副は小外刈に秀でて大

樋口 松尾 村の側面を襲撃せしこと前後

樋口 大島 數回。けれども大村もなかな

西田 大島 かの防禦者で、うまく空をう

西田 鈴木 たせ、力めて敵を疲れしめた。

田原 鈴木 突然、江副が満身の勇を鼓し

田原 永原 て突き入りし腰車は、美事大

田原 佐々木 村をして殘念がらせた。喝采。

福田 大神 江副。富松。富松の勇氣は吞

佐藤 大神 牛の如く、稍前戦に疲れたる

佐藤 松隈 江副をして顔色なからしめた

木塚 松隈 「ウデシキ」にて富松の勝。

高木 松隈 日田。富松。日田は随分脊高

高木 宮本 さ好漢で、寢業に妙なるが如

岳野 宮本 く見受けられた。双方ともに

岳野 是松 七轉八倒と云ふ有様で、一寸

岳野 小野 偉觀であつたが、又もや「ウデシキ」にて富松の勝となつた。

岳野 石河 原口。富松。体は小さいが、敏捷

岳野 永松 なる原口。如何にもしてうち取ら

小久保 永松 んど無二無三に攻め入つたが。剛

鈴木安 永松 強なる富松は荒獅子の如くに一吼

松居 永松 。又もや原口を体落で攻め落した。

城 永松 柳。富松。之を見た赤軍の面々は

城中 惠利 色めき初めた。少なからぬ味方

佐伯 惠利 をうち取られたので、誰か出て敵

九田 今永 を挫ぐだらうと、手に汗を握つて

九田 中光 居たが、靜かにあらはれたのは、

九田 社家間 名にも似つかぬ、頑丈な柳で、落

熊澤 ち付き拂つて、電光の如く敵に空

を切らせ、押へ込んで動かさず。「起こすな」と

呼ぶ紅軍、「起きよ」と叫ぶ白軍。刻は移りて遂

に柳の勝となつた。けれども富松の手腕には、

敵も味方も感賞した。殊に白軍のためには、羅

馬の小スシビオとも言てもいふだらう。

柳。市川。あまりに自家の堅固を顧慮して、森

また活闘がなかつた。柳は又もや、大男の市川を取つて押へ、白軍をして戦慄せしめた。

柳——松本。観者の目もくらむ許りに、ぎり／＼とまわると數回。柳の体が乱れたのを機として、松本は剛力を全身に試み、押へ込んで、「袈裝固め」の下に捲いた。

野村——松本。押へ込みは、投業よりも却つ多大の勞力を要するもので、疲れきつた松本は、見事なる野村の大外刈に倒れた。

野村——中川。最も激烈で、重に「コロビ合ヒ」の争ひに。双方の呼吸は愈急。中川が「シツ」のかけ聲とともに、足業稍功があつた。續いて上四方固めに野村は降伏して了つた。

渡瀬——中川。縦横ともに申分なき、肥大なる中川に、渡瀬は應戦甚だ力めけれども、嵐の前は木の葉が散ることく、中川の吊込み足に、倒れたる渡瀬は是非もない。

松元——中川。中川に少しの疲勞せる点あきば、余程の大力と見えた。松本は寧ろ優しい方で、五角の力であつたら、業は慥かに見る可きもの

があつたらうが、力及ばずに押へられて敗北。隅田——中川。赤軍の恐慌は一通りでなかつた。阿修羅の如き中川に應じたのは、仁王の如き大漢にあらず、花の如き隅田と呼ぶ男。接戦數合、勿論中川が優勢であつた。白軍の意氣益々昂り、赤軍益々疲弊。吊込み足で中川の勝。

原——中川。原果して如何なる人ぞ。小兵か。大兵か。いつまでも中川を打ち取るものがなかつたら、赤軍の運命も豫想するに難くないのである。併し幸ひなことには、原は雲つく許りの奸漢で、奇策を胸中に盡してゐたのだらうか、出るが否や襟をめかけて攻め込み、抵抗する中川を新手の剛力に壓服して、十字絞で成功した。大喝采。中川は前の富松と共に、兩スシビヲとして長く誌上に名を止むるであらう。

原——東野。腰の構へ、双方共宜しくなかつた引分。黒瀨——福富。双方共肥大の勇士。温乎たる福富。居然たる黒瀨。氣味よき程であつた。黒瀨の吊込足に、見事福富は勝を讓つた。

黒瀨——吉川。なか／＼ねないどの噂ある吉川は、

矢張りねずに敵を苦しむることが巧だった、剛力の黒瀬は例の吊込足でつり込んで勝つ。

黒瀬―柴田。柴田の取方は非常にうまかった。

頑丈なる体に、加ふるに業があつて。小外刈に刈倒して柴田の勝つ。

齊藤―柴田。齊藤もなか／＼やったか、大外刈が少しぬるかだったので、柴田から返へされた。

小幡―柴田。長大の小幡は、何んの苦もなく十字絞で、柴田を打取った。これは平素修鍊のよい爲めであつたのだらう。

小幡―廣田。出合頭に廣田の巴投は見事成功。

八尋―廣田。互角の体格、好取組であつた。廣田は慥かに利き業を修得してゐるのだらう。又

もや休落で八尋を敗った。八尋にも随分見る可き業はあつたが、後れたのは残念。

寺田―廣田。寺田は敏捷なる業に巧で、頗る氣あり。つり合ひよき体格を左右前后にふり廻はして、敵をして向ふ所を知らしめなかつた。廣田も應戦力めて不足はなかつたか、袈裟固めで敗られた。

寺田―松尾。松尾は肥前大村の出身。頃來余り瑞邦館に顔を出さぬ爲めに、勇氣稍喪沮したるかの感がある。長い間奮戦の未押へ込みで、

松尾の勝となつた。

樋口―松尾。足業に妙なる樋口は、飛島の如くに大外刈で敵を破つた。

樋口―大島。共に筑前福岡の出身で、大島は体は稍樋口に劣るが、敵を防ぐこゝろ頗る巧で樋口の大外は常に空虚を拂つた。最後の大外刈を返へされて、樋口の敗は是非もなかつた。

西田―大島。激しき争ひの末、十字絞に散つたは大島である。

西田―鈴木。アハヤと云ふ間に鈴木 of 十分なる体落がきまつた。

田原―鈴木。田原は福岡天真館の出身で有望の士。先づ吊込足にて鈴木を倒した。

田原―永原。永原も劣らぬ勇者。濟々疊の出身でなか／＼見事な業をやる人。田原は續いて。永原を吊込足にて敗つた。

田原―佐々木。長大の佐々木。近來は殊に業の修

得見る可きものがある。流石の田原もあぐんで見えたが。奮戦數度「白ッ」と呼び、「赤ッ」と叫ぶ聲、館に滿ち嘯虎跳龍の慨があつた。一分の引分命が下つた刹那、田原の立派なる脊負わどしに成功したのは上々出來。歡聲湧いて滿堂破るゝ許り。

田原―大神。大神も同様、天真館の出身である。數度の戦ひに四分の疲勞ある田原の、輕き大外刈を返して大神のね手柄。

福田―大神。福田は有數の士。常に攻位に立つて敵と争ふのは甚だしい。併し余りに過勞して功が少ない働きは戒む可きである。故に隨分業はあつたが、成功することなく、却て自家の疲勞を招いて、大神のために押へ込まれた。

佐藤―大神。佐藤は久留米明善校の出身で、なか／＼折り合つた体である。大神とは好對の取組。大神は大腰を試みたが、成功せず、佐藤の脊負投で倒された。本日大神に比較的活氣の足らなかつたのは如何。病氣のためか。

佐藤―松隈。松隈も福岡修猷館出身の英士で、柔

道には持て來いの体格。活潑なる取口には觀者の感賞しない者はなかつた。合すること二三合。疾風の勢凄まじく、物の見事に脊負投にて名譽を得た。

木塚―松隈。偉大剛強なる木塚、南蠻鉄の如に大胸を張りて、一掴みに掴み殺さんする有様。恐ろしとも恐ろし。併し惜むらば利き業の少ないのを。ために松隈の体落に残念なる最後を遂げた。終始木塚の防禦主義は戦場では不利である。願くば進取主義に變せられんことを。

高木―松隈。雲突く許りの大男。加ふるに斯道に熱心の士なる高木。彼れの長き／＼足は松隈をして大外刈の利き業に最後を遂げしめた。

高木―宮本。宮本は本日黒帶の先驅で、輕き体と敏き業とは人の知る處。併し敵が高木で、業や、足手の働きの如きはしばらく措き、其長大なる体格に於て。高木の方が優勢ではあるまいかと、思はれた。然るに既に組合つてからの取口が吾人の豫想と全く反對して、宮本はなか／＼うまくやつてのけた。而かもこの大男を、脊負投

で投げたときには、満場破る、許りの大喝采であつた。

岳野―宮本。岳野は肥大前村の出身で、中途斯道を中止したので、稍技を損せりと聞いて居た。徐ろに出で来り、溫顔を以て敵を迎へた。宮本も劣らぬ勇者だから、よく應戦したが、吊込足で

見事に岳野は初陣の功名した。

岳野―是松。神色自若。一点の疲勞なき岳野。續いて是松を攻め落した。而かも吊込足で。

岳野―小野。老功の武者小野は、小癪なる敵の振舞。たのれ只一撃と荒れ出でたが、又もや岳野の吊込足でやられた。

岳野―石河。斯界の熱心家で、一方の旗頭なる石河は、注意深く四方に氣をゝいて、立ち廻つたが、岳野は又もや敵の虚を見て、吊込足を成功せしめた。如何に吊込足に妙なる事よ。如何に吊込足に巧なる事かな。大喝采。

岳野―永松。柔道界の豪將永松はあらはれた。雄堅なる相貌。偉大なる体格。見るから仁王の如く。これには岳野も敵しがたし。忽ち林蔭で失敗し

た。
小久保―永松。小久保も尋常の士にあらず。攻守よくやつたが、平素あまり修練を欠ぎしたため、か

もろくも体落でやられた。

鈴木―永松。鈴木は熱心なる勇將、業もあれば、力も之れに應じて強い、先づ申分ないだらう。數度の奮負きかず。數回の屈拂又功を奏せず。少し攻めあぐんで見わたるとき。永松すかさず巴投を試みた。少しく横にゝれて居たが。鈴木の体が地に付くとき、扁平に變じたるために終に敗となつた。

松居―永松。松居も鈴木と伯仲の間にある勇將で、赤軍の旗色が振はないのを慨し、吞牛の氣と、鍛鍊に積みし岩の如き体を以て、永松に立ち向つた。業は富裕なり先づ試みんと、巴を以て攻め立て、随分敵の膽を寒からしめたが、充分でなかつた。總じて大男に巴は得策でないのである。松居は小外を試み、次で大外を試みしが。殘念。永松は待ち設けたやうに、見事に返したので松居は敗を取つた。赤軍愈々盛。

城。永松。出で来るや否や城は、この大男を体落で、地響さして投げたので、赤軍の狂喜は言はずもがな。満場大喝采であつた。

城。惠利。互角の体格で。何れも點のうち處なき猛將。惠利は元氣面に溢れて、攻め立て攻め立て城をして應接に違なからしめた。惠利の取口は頗る丈夫で、例へば敵から業をかけられたる際に、少しも油斷せぬのであるから、敵を返すことも従つてうまい。即ち城が恐ろしい大外刈を見事返へしたも、其れが爲めであらう。

田中。惠利。二三合忽ち大外刈返しで惠利の勝となつた。惠利の体の構へは少しも乱れてゐない。却て用心に用心したる程の力の中心が堅固であるので、田中が大外をやつたものだから、自滅する様なものである。

佐伯。惠利。佐伯が老練なることは衆人の知れる處で、大活劇を演出するだらうとの豫想に反し、防禦の一點張であつた。慥かに誰れの目にも、左様に見えたらうと思ふ。併し流石にうけ答へて引分。

丸田。今永。今永負傷して中止。

丸田。中光。小刈に雷名轟きし中光、体落に勇名比なき丸田。共に是れ斯界の重鎮で本日の副將としてあらはれたのである。中光先づ足業二三を試みたが成功せず。次で丸田大刈を以て敵の中堅を突いたが聊か足らず。二度体落は非常なる速度と勢とを以て、中光の左側を襲撃したが、中光は体をはした積だつたらうが、丸田の足はなほ去らずして敢なく中光の敗となつた。喝采湧く。

丸田。社家間。さすがは大将、悠々せまらず出で來り、氣をしづめて騒がず。丸田も蔑し難き大敵なれば慎重の体度を以て向つた。丸田は例の体落を以て激しく社家間の右翼を突いた。大分成功したが、師範の判決なく、再び突いた。社家間の前の様に倒された。このときも師範命なく、續いて丸田は必死で同様に敵の右翼を襲い、社家間は見事倒れたので「一本」の命下り、丸田の頭上には月柱冠が冠せられた。社家間は襲撃を受くるに度毎に、返へさんとしたが、体倒れて後で

○ヒュース嬢ノ演説

十月三十一日、我龍南會は英國有名の教育家、ケンブリッヂ大學師範部長ヒュース嬢を聘して、二場の演説を乞ひぬ。

櫻井校長の紹介終りて、壇に上られたる嬢の、いと清らかなる聲音もて、「英國大學につき」て演べられたる概要は、

諸君、私が此日本に在るのは、僅か十四日に過ぎませんが、目に―耳にするもの、皆私の感興を引かないものではありません、今此處に幾百の男子諸君の前で演説しますのは、又實に何とも云へない感があります、私は此處に教育と云ふ事に關して英米日の比較を出来るだけ述べて見やうと思ひます、然し諸君は高等學校の學生であつて、將に大學に入學なさるゝ御方々であれば、英國大學生の有様を述べて見やうと、態々此題を選んだ理由であります、諸君は必ず英國大學生の或點に付きて、充分の興味を受けられむことを信じます、抑日本と英國とは余程類似

あつたので功あしとの事であつた。

右にて紅軍の勝となり大將熊澤が残る事となつた。武藤柔道部長は、勝者に賞品を、五級甲以上の編入者に黒帶を授與された。

二等賞を得た者

横田。山田。江副。松本。野村。小幡。寺田。樋口。大島。鈴木。西田。松尾。佐藤。高木。宮本。城。

一等賞を得た者

古屋。原正

銀賞牌を得た者

柳。黒瀬。柴田。廣田。大神。松隈。惠利。丸田。富松。田原。中川。岳野。永松。

黒帶を授與された者(五級甲編入者)

鈴木。福田。佐藤。木塚。佐々木。永原。田原。大神。松隈。岳野。最後に五級甲以上の三本ぬきを行つて勝者に賞品を授賞した。

附記、五級甲以下の編入者は追而掲ぐる事に

しやう。

の點か多う御坐いまして、或は日本を東洋の英國と云ひ、或は英國を西洋の日本と稱します、又兩國とも共に古い國でありまして、日本が急速の進歩をなしたにつれて、英國も漸次進化に赴いて居ます、近頃は又此兩國の間に政治上の同盟が結ばれました、教育の點にも英國が日本に興味をもつて居ます事は、此度私が英國政府から報告を頼まれましたのでも分ります。日本の大學は獨逸に似て居ますものゝ、又英國大學の事を述べましたら、其間に興味が湧くかとも信じます。

諸君は今英語を學んで居られますから、早晚英文學を學ばるゝでありまじやう、して英文學は英國人の生活を知らぬ者は、了解し難いのであります、又英人の生活を解せんとならば、英國大學の或事を知るの必要があります、英國に於きましては、社交上、文學上大學の感化は實に大したものであります、素よりユニヴァーシティーなる語は、英國では米國と異なり、大なる意味が含まつて居て、實に深遠にして高尚なものであります。

す。

英國には二つの古い大學と、五つの新らしい大學とがあります、新らしい大學は皆二つの古い大學の感化を受けて居ます、私が委員となつて、特別な基礎の下に立てました、ヴェルズ大學の如きもうであります、此古い二つの大學とは即ちオックスフォードとケンブリッヂとであります、此二大學の間には大差が存して居ます、私はケンブリッヂにありますが、或は最負するかも知れませんが、オックスフォードは都會でありますれば、市と大學との二分子があるのに代へて、ケンブリッヂは小市でありますから、大學の價值のみが知られて居、オックスフォードはロンドンの通路で從て行人繁く、ケンブリッヂは偏僻の田舎で問ひ來る人も少なくあります、オックスフォードは思想家に富んで、舌に筆に世に名ある、大演說家、大新聞記者を出します、ケンブリッヂは簡潔に己が思想を發表する方面に於て長して居ます、オックスフォードは政治的で、ケンブリッヂは文學的で、

彼が政治家を出す間に、此は詩人哲學者を養成して居ます、此二大學の差は畢竟大學に自由が與へられてあるからだと思ひます、日本に於ても東京大學と京都大學との間には、大なる差違のあるのを見ましたが、此は實に喜ばしい現象だと考へます、英國は實に其自由があるが爲に、其特長が發達するのであります、諸君若し彼の二古大學の著書を播けば、其思想と其發表の方法とに著しき異點を見出すでありますやう。

英國大學の目的に二つあります、一は大學を以て高尚なる普通教育を授ける所とし、他の一は大學を唯研究的場所とするのであります、此は一寸反對に見へますも、英國にゐるものは其特長なる目的を直接に見ることが出來ます。一は即ち「ゼンツルマン」をつくるので、學生は教場よりも寧ろ其以外に學ぶ所が多いのであります、即ち學生は大學に居て已に社交的生活を實行するのであります、日本の大學生を見るに、此點に付て大に欠けて居るやうに思はれます、又英國學生は能く法律に服して居ます、獨逸の

自由なるのに反するやうであるが、其服従の下に溫き活動が現出されつゝあります。研究を積んで學者となる者でなくとも、此理想的生活をなせば大なる利益があります、而して其生活は實は簡易でありまして、嘗て英國王子が大學生としてケンブリッヂに居られた頃、私の友なる一米人が切りに其王子を見たいと望んで居ましたが、或時共に市に菓子を買つて居た時、會々王子も來られて、同じく菓子を買つて去られたのを見まして、友が大に喜んだともある位であります。又智力的高尚なる生活をもなします、私は齡が長けて居ましたから、男子部の經濟研究會に入ることが許るされました、で會に臨んで見ますと、實に豫想外にも、皆の學生がいと眞面目に經濟に付て、或は社會改良に付て討究して居ました。

日本の大學生は皆勉強に追はれて居るやうです、英國では勉強は一日六時間許りで、其以外は社交的事や、自分勝手の讀書で暮らすのであります。土曜には晚餐會が催されますが、此時

は歐洲の名が知れて居る様な偉人と、交際する事が出来ます、此等の人の談話には、一寸した戯れの間にも高尚な智的の事が含まつて居て、實に利益を得ることは少くありません。試に大學に入らない前と、卒業した後とを考へて見ますと、唯三四年間の大學生活が如何に其生活を高尚ならしめたかに驚かぬ者はありません。前にも述べました通り、英國大學の目的は二つで、其一つは今申した道徳上、智力上に立派なる人物を養成するのでありますが、日本には他の一の學者となす目的のみで、此目的は全くない様に感じます。

今假に私が一人の若き書生として、カレーヂに入て其生活を送らんとする者にしましやう、今カレーヂと申しましたが、米國ではカレーヂはユニヴァシチーの下に位して居ますが、英國ではカレーヂの集まつたものがユニヴァシチーで、此には寄宿舎の設けが有ります、女子には二つのカレーヂがあつて學生は其一を撰び、男子は多分の内より一を撰ぶのであります、其撰方は或

は運動が盛んな理由で此を好み、或は其教師が多いと云ふので彼に赴くと云ふ有様であります、男子は寄宿舎に入つては、曾て大詩人、大歴史家、大小説家の苦學研究した室を得る事が出来ますが、此は實に大感化を其學生に及ぼすものであります。愈々大學の課程を終ゆれば學位試験を受けます、此學位試験に二種のりまして、一は普通の學位試験、他の一は名譽の學位試験と申します、學生の八分の七は普通學位試験を受け、残りの八分の一が名譽學位試験の準備をするのであります、普通の方は容易に通過することが出來ますが、名譽の方は余程の勉強がなくしては落つるので、一度其試験に落第した者は又其試験に應ずることは出來ないのであります、又試験準備も或年限間になさねばなりません、學科に由て差異はありますが大抵三年か四年であります、普通學位試験を終へて名譽學位試験を受けんとする者には、其間に九ヶ月の猶豫を與へます、で學生は其間に準備を終らなければなりません、實に非常な困難であります。同食

英國學生の習には、一日に五六時間精をこめて勉強します、近くに少し位の騒ぎがあつても其音が耳に入らぬ程までにやります。日本には此勉強法がないやうに見受ける、長時間唯機械的の勉強より、短時間心をこめた勉強が、思想を練る上に就て余程勝つて居ます、私が大學に居ました時には五六時間以上勉強する學生は一人もありませんでした、此ん事を申せば日本人は英國學生を余程の怠惰者と思ひになるかも知れませんが、學ぶと云ふ時間は誠に短く、一學期に八週、一學年に二十四週間位、唯名譽學位試験を受ける人が三十週間も勉強するのみで、其も暑中休暇の間に勉むるのであります。

寄宿舎には、女子は一人一室と云ふ有様ですが、男子は一人で二室や三室も占めて居ます、而して其學友間の情温かなことは、日本人の眼には寧ろ奇怪に映するかも知れません。又大學附屬の教會がありまして、日曜には二度禮拜があります、一度は朝でありますから、學生は日曜とて朝寐は出来ません、勿論出欠が付くのであり

ます。朝の祈禱は十五分間許りで、其後一同食堂に入つて、共に食事を済まし、九時迄は友と共に庭内散歩や、談話で愉快に過ごし、其後勉強に掛り、質問があれば、講師に聞くのであります。教授と云ふのは、學生自身に研究の出来ざる、即ち講師自身の外其鍵を持たない學科に付て、講義するのであります。室には二つの戸があつて、第二の戸が閉めてある時は、勉強して居るので、他人は一切立入ることが出来ません。正午食事後の三四時間は、運動や或は知人訪問に費やしまして、夕食前一時間許勉強します。又夜には文學會、討論會、或は儀式なき社交的會合がありますが、學生は此に依て大に智識を増進するので、西洋の偉人と稱せらるゝ者は皆此境遇を通過したものであります。此等の大人物や、英國の大名などが、田舎に住居しまして、自分自ら智力、道德の規範となつて、社會の改良を力めて居ますが、此等の事は日本にも望ましい事と思ひます。

三四年間大學の生活を送れば、自づと虚飾を厭

ふやうになつて高尚なる生活に向ひ、又立派な友情が湧いて來ます、日本では未だ男女の學生間に親交の形成せられて居るのを見ませんが、英國では男女を問はず友情は大に發達して居ます、日本の文部大臣に逢ひました時も、共に同窓の友であつたが爲に、東西人種の別なを全く忘れて、實に床しい感じがしました。

費用のことに付きましては、女子は少く男子は多々かゝります、男子は室も多く、又食物も美でありますから、少なくとも一年に二千圓を要しますが、女子は一千圓で済みます。

明治の初年に日本に大革新があつたと等しく、ケンブリッヂにも大變化がありました、四十年前以前には英國教會の信徒でなくては入ることを許されなかつたが、今には左様な制限は無くなりました、又其時迄は貧生は入ることが出来なかつたのが、次第に新大學が立て費用が少なうかかるやうになつたので其傾向も減つて居ます、女子は其時迄は入學するを得なかつたのが今は許さるるやうになりました、私共は實に我等

の父母が曾て得ざりし特權を得て、勉強することが出来るのを大に喜ぶ者であります。今は又大學の精神を廣めんが爲に、若くして學位を得た人などが、大學に入る事の出來ぬ青年を、各地方に集めて講義をして居ます、此事をユニヴァシチー、エキステンションと申します。

諸君卒業の後は、必ず東京、京都の二大學に入るゝでありますやう、希はくば英國大學に於けるが如く、又日本大學の大價値を得られん事を此處に望みます。

○文科大學たより

熊城の秋色まさに酣にして、花陵山の紅葉、西湖の蘆荻、諸兄の詩腸を動かすこと切ならんと存候。今や身は茫大なる塵深き首都の一隅にあり。千里月明かなる夜、當時の曾遊を思ひ、轉た感慨に堪ふ不申候。

もて入學以來既に二ヶ月。然も未だに同級諸文豪連の顔をも名とも知らざる程の吞氣さ加減、御義ひ被下度候。従つて赤門便りなどとは思もよらざる所に候。されど名乘られて退くは武士の譽れに非ず。仰に従ひ先づ「ザット申述候。先づ第一に小泉八雲氏の英文學の講義に候。吾人はとりて最も重要な申すまでも無御座候。これは英文學史、英詩評論。テニソン詩集講義の三つに分れ、各一週三時間宛に候。中にも英文學史は三年にて完結するものなれば、其詳細なることは申すまでもなく、殊に昨今は古代文學なれば、濫晦なる古詩の引証などあり、筆記の訂正に中々骨折れ申候。さればとて一般の文學史を引張り出すも、殆んど益なくオースリテイ」を發見するに苦み申候。

英詩評論とは、一個の問題を捉へ、之に關する英詩を挙げ、批判を加ふるものに候。最も興味あるものに候。前學年には、英詩上に現はれたる「木」なる題目の下に、評論されたる由なるが、本學年に於ては、更に一步を進めて、英詩上に

現はたる「花」といふ題に候。然し本題も前週を以て完結したれば、本週よりは何か面白き題を捉へて批判する可しと存候。こゝ當分言はぬが花なるべく候。

テニソン講義は諸兄の想像に任すべく候。改めて説明する程のもの無之候。

以上三者共に英語にて講せらるゝは勿論、其口調の速かなる驚くばかりにて、高等學校時代のデクタートと同視せば、非常なる誤りに候。大に同志諸君の留意を要し候。

小泉氏は嘗て龍南に教鞭をとられし事もあり、米國人にて本邦に歸化されし人なるとは、諸兄がどくに御承知の事と存候。その日本好なるほど凄じき程にて、學校にても、烟管にて刻烟草をバク／＼とやられるところ、妙と申す外なし。その半白なる頭。盲したる片目。低き脊。石塔の如き帽子。列舉し來れば諸兄の腦中にはたゞ一個の野翁の姿のみ畫かるべきも、何ぞ知らん、氏に接すれば、照々たる和氣と、配すべからざる風とに撲れ申候。その一處敷置に立つや、素

引博證、説き去り、説き來り、卓厲風發の概なきも、淳々として汲めども盡きぬ泉の如く、流石當代のオーソリティーと仰がれ申候。時にペンの音、インキ壺の響の裡より、「時には引かゝればいゝが」どの嘆聲漏るゝにても、大概是察せらるべく候。

ケーベル氏の哲學概論は四時間にて、ブローケン、イングリッシでのべつにやられ、筆はどても動き不申候。尤も能く注意して聞けば大方は了解と了解さるゝ由なれど、プリントあるを以て、存外欠席者も多く、生なごは近頃概論を了りて、哲學史に移りたる由聞き及び候——思はず自分の不精まで吹聴し驚縮々々。然し一方に於ては、非常に勉強致居候へば損得相償ふべきかと存候阿々。

ろはかのバッフ氏の佛語と、エック氏の羅甸語とに候。殊に前者は午前七時より始り、且つ教師が宣教師丈けに時間の掛直など素よりあらう筈なく、未明霜を踏んで通學する様、我ながら感心の至りに候。大聲にては申されず候も、實は欠席

すれば少々マイナスをやらるゝ故に候。ろの乾燥なる無味なる到底た話にならず候。三十歳さげてアー、ペー、シェー、より唸り出すなど、不用意の滑稽は何程にても求められ候。

獨逸語の方はフロレンツ博士のウガルヘルム、タルの講義一時間、上田文學士のチャールス十二世。ミカエル、コールハース各一時間あるのみに候。就中チャールス十二世は極めて讀み易きものに候。以上にて英文科一年の正課は盡き申候。此外スウフト氏の英語實習二時間有之候。これはグリムのメーテルヘンを基礎として會話、作文を試みるものに候。

要するに無届欠席にて總平均より三點引去らるる氣遣もなく、遅刻も欠席も一切未構なしの自由なる天地。不精の聲をあげて生れ來りし生等とはこゝに蘇生仕候。ただ、ただ、日々吞氣に日を暮し申候。

其他課外として新博士連の諸講義。村上博士の佛敎。萩野博士の劇の沿革。槐南詩宗の白詩講義。松本博士の易。フロレンツ博士のゲーテ講義

など、異彩を放つもの少からず、中には生の講聽したるものもあれば、何れ再び詳らかに御報導申上ぐ可く候。

時節柄諸兄の健在を祈る。勿々。

十月二十八日

流 翠 生

○赤門たより

陽關三疊の曲を歌ひて戀しき九州を離れ、秋風落莫として百萬の帝都を襲ふ頃、喧しき神田に下宿住ひの新紀元を始め申候

新橋停車場の意外に小規模なるに驚き、銀座街の島國的小豆的の煉瓦造りに驚き、老茶の水橋を過ぎては黄塵千里の概あるに驚き、本郷大通を過ぎては泥濘さながら味噌汁を撒きたるが如さに驚き、新聞賣の聲、牛肉屋のイラッシャイの聲、街頭の藥賣の聲何れも朝鮮のアラン曲の如く、輕佻浮薄亡國の音なるに驚き、かくてはミカドス、エンバイアの首都を東洋文明の中心なりとするは上海香港さへ瞥見せざる余にとりて僭越の嫌ある様に感ぜられ候。かゝる多くの

九十八

驚きは赤門をくゞりて更に大なる驚きと變じ申候、碩學の多きによりてか、あらず。圖書館の大なるによれるか、あらず。只天狗徒に多くして殆んどこれ岩谷天狗の類。名徒らに高くして其實寧ろブアなるに驚きたるに外ならず候。

嘗て中學にありて龍南の赤煉瓦を望む、巍峨なる校舍稜々たる松風、あゝ盛なる哉以て余輩の理想に適合するを得むと。而して三年の星霜矢の如く去り、少々禿げかゝりたる頭を撫して、空しくエルワルツンクの餘りに大なりしを悔ひ候ひき。腦中の無一物は元より自から招きし罪に候へども、一時に餘り多くつめ込まれ胃弱の小生屢々腹痛に病み候て、シミ／＼人生讀書艱難始の味を覺ゆ申候ひしが、赤門をくゞり候様になりては、學なく識なく英語さへ碌に喋舌り得ぬ身を以てをうけなくも大學生と號し候事中々に我ながら片腹痛きを覺ゆ居候處、學生一般の風潮やら、教授諸先生の講義なるものを聞くに付け又昔日の嘆を再びせずやと、今からるる／＼禿頭を撫で居申候。

龍南にあり候折に待たるものは、先生の体みど大學の通信に有之候ひしが、一向に先輩諸氏の御通信も無之て『待たる身より待つ此身が』とコボシ度相成候事屢々御坐候ひしが、通信の少ないのも尤も次第にて。田舎出のホヤ／＼には何見ても面白く、持參こそ致し居らね、實は赤毛布先生同様の心地にて、第一に先づ淺草などの醜窟を御見舞いたし、こゝに奇麗に洗禮を受け候て、江戸ッ兒と生れ變り、口髯さへ充分ならぬ分際を以て、髪にはコスメチックの苦心あざやかに讀まれ候程に致し候までには、大分繁忙を極め候事とて、始は大々的通信にて龍南を警醒せんとせし心組も何時の間にやら消え失せ候て、龍南の風評も次第に致さぬ様に相成申候、かゝる折柄本日龍南會雜誌を頂戴し、神風かよふ立田山の風色、今更の如く腦中に浮び申候間、所謂斷髮令の範圍を脱して大分艶々しく相成、少くはコスメの驗見へ居候頭をなでて、先づ此消息を洩し候。かく申せば大分ハイカラとなり濟し申候様なれど、禮讓を心得居る小生、ま

だ先輩全部にも行渡らぬ風習を眞似候様の僥越はいたさず候間、御安心被下度候呵／＼。

閑話休題、小生の職分の獨逸法にては時間割左の通に御座候

月●八—十 十一—十二 一—三

曜●民●平沼氏

火●憲●穗積氏
ロ、ロ、ロ、戸水氏

水●刑●岡田氏
比較法制史 美濃 獨逸 (二時—三時)
部氏 法 (三時—四時)

曜●本●獨逸法
憲法
デルブル 岡本氏 (三時—四時)

金●民●獨逸法 (十時—十一時)
ローマ法

土●比較法制
曜 (八時—九時)

計貳拾貳時間

右の中●印は法律政治科全部を通じての講坐に有之、○印は法律科のみに通じ、他は獨逸法のみの學科に御座候

民法は本年の一回生は富井博士の受持の筈に候

ひしも病氣の爲に職を辭せられ平沼氏代りて講義の任に當られ候。富井博士の辭職は當に小生等にとりて不幸なるのみならず、又法科大學の不幸に御坐候。此事に關しては巷説紛々容易に真相を知る事を得ず候、或者は氏の辭職は穂積派に對して嫌焉たるものありしより起れりと云ひ、或者は單に病氣の結果なりと申候得共、先生が早稻田大學の羅致する所となり、力を全校に尽さるゝより見れば、全然病氣の爲とのみにて首肯し難く御坐候、此等詳細の事は小生の如き内情に通ぜざるものゝ彼是可申事に無之候に付、諸君の想定に任し申候。兎にも角にも民法の良師を失ひ候は嘆じても尙餘りある事に御座候、されば全先生の學説は僅に京都大學の岡松博士著の民法理由により隴氣に窺ひ得るのみ、誠に残念の次第に御坐候。

平沼先生は英法科出身にして二十一年の卒業に有之、爾來法官として精勵せられたる結果は目下大審院の勅任檢事たり、同院のキケ者に御坐候。聞けば先生中々の勉強家なるよしにて博學

の評も處々より承り候處に御坐候、年齒三十七八なるべし、容貌端麗、メリケンの茶の中折帽子中々意氣に有之候得共、講義中頭を左右に振らる癖ありて中々可笑しく見受られ申候。一体これ迄餘り人口に上らぬ御方に御坐候ひし故何方に聞き候ても精細の事は相分り不申候、

講義は説明的にて、全体を記すれば非常の重複せるものと相成、要領を筆記せんとすれば問々重要な事を書き落し候様の事御坐候て、一同閉口の摸様に見受けられ候。而し感心には一言一句も落さざらんと汗水流して筆記し居られ候向も大分有之候。一般に不得要領との評高く御坐候が、今度漸次御慣れ被遊候は、大分宜敷相成候義と存じ候。早稲あたりの話によれば全先生の講義尤も明晰の由にて好評嘖々御座候が、當校にては却て不評判に御座候。而し何もノートのみに援り切り居候譯のものにて無之、諸先生の講義は一寸ヒントを與へらる位のものに御座候は、それより先づは各自の研究次第に御座には、先生の講義がマズ御坐候とて、無論

失望には不及候、注入的の教育も大低によし候て差支なかるべく候。

穂積博士は尤も褒貶紛々に有之候、曲學阿世とか、不諭理とか、欽定憲法とか何とか彼とか一々擧げ來れば際限無之候、要するに不評判の中心たる如く御坐候得共、一方より云へば佐々克堂氏のアンペラズムの根原となるものに御坐候故、從て隨喜の方々も不尠候。小生の愚見によれば講義兎に角論理立ち居候て思ひの外聞き所有之、一説として參考に供するの價値は充分可有之、萬更捨てたものに無之と存候。先生風采野羊の如く、顔色蒼白、令兄陳重氏の風采瀟洒にして活氣あるに似るべくもあらず候。されども其講義は流石に慣れたものにて進み方尤も速に御坐候。其語調は恰も一何錢何厘也と算盤に置かする様にて、毫々緩急なく、接續詞や語尾などを速く喋舌る事無之候間、筆記も至極樂に御座候。而し述ぶる所繁雜なる事甚しく、面倒臭き事云ふ可からず候。例へば「穂陳ホツチンと穂八ホツパチとの關係は平等の關係にあらず、權力の關係なり。

穂陳と穂八とは兄弟なり、穂陳は穂八の兄にして穂八は穂陳の弟なればなり。故に穂陳と穂八との關係は權力の關係にして平等の關係にあらず」と申す様のヤリ方に御座候。加ふるに引例頗る多く到底其繁に堪へず不申候得共、試験の答案などに例へばなど書き立て候時は、ヒドク御氣色を損じ、不肖八束憲法の研究に従事する事十五年、引例なくとも答案の了解は可仕候、などとヤリ付けられ候もの御座候由。兎に角穂積先生の憲法ありてこそ井上憲法(京都大學)副島憲法(早稻田大學)も御座候なれ。穂積先生自愛せらるゝはツマリは井上副島兩氏の特徴を發揮する事と相成申候故、一人の振不振は事三人に關する事と相成候次第に御座候阿々。要するに主權の存在などは各人の着眼点次第によりて、如何様とも相成候ものに候故、自説をのみ固持して他人を嗤ふは、山中にありて山容を知らざる類なるべく候。先づ先入の見を去りて虚心平氣にして來り聽かれよ、博士の説も亦取るべき處あり失望にも及ぶ間敷候。

●●●
岡田博士の刑法は中々評判宜敷候、而し此の幾

分は間々駄法螺を並べ時々滑稽を交へらるゝに起り候。されども講義明晰、腦のグリアなる事は元より御坐候、講義には岡田刑法講義案なる百二十八頁の半面印刷の書籍を土台とし、其の一節々々に説明を加へられ居候。五尺一二寸の小男に御坐候得共、中々の美男子、一寸粹な所御坐候間、サル處にての持て方非常に御坐候よし、風の音信に聞き及び申候。博士性來多能、よく流行歌を諳し、宣命祝詞、催馬樂等に精しく、殊に圖案に妙を得られ居候由、本年は試験の際、塗板に書付けられし自作の都々逸『子供もつとて書生にやせまい、やつれ姿の試験前』諸君ドーデスとの一言に頭を上げし瘦男連中、赤面の外一語なかりしとの事にて御坐候。かゝる逸話は枚舉に遑あらずとの事、講義の際に笑聲起るは此先生の時のみに御座候
●●●
レーンホルム先生の獨逸法講義左程分り悪くは無之、御校のハーン先生のよりも餘程分り易く御座候。殊に少々六ヶ敷字は一々丁寧に塗板に

書かれ候故、筆記の時も無論困難は無之候、説明も大抵相分り申候故別に困難の事も無之候得共、只試験の際のみは閉口可仕と皆々申居候。これ全先生の問題は大低ノート以外のものに御坐候故にて、是非ともテルンブルヒかウキンドシャイドか精讀いたし置く必要有之候。而してこれは特待生とか、恩賜の銀時計とかにあり付かんと欲せらるゝ方々の事にて手前共には、サルの柄になき野心も無之候間先々樂に御坐候。先生の風采は猫に眼鏡をかけた様にて、身丈はハーン氏などよりもズツト小さく、終始ニコ／＼中々愛嬌ある先生に御坐候

デフルンブルヒを講ぜらるゝは、第一の教授たる獨逸仕込のドクトル岡本氏に御坐候、先生何時も顔をシガメて怨むが如く訴ふるが如く講ぜられ候に付、次第に小生等も怨メシイ様な心配と相成、眠さ加減丸で話にならない位に御坐候。而しコレモ矢張一課として獨立するものにて御座候故、成績のヨロシキ事受合の方々はセツ／＼と假名の入れ方有之居候。

美濃部先生はまた飯朝後間もなき事とてまだ始業無之候。戸水先生は御存じの通り清韓漫遊中にて休講中に御坐候。

序に申上候。英法はテリー氏一年間の賜暇歸國中にて目下は松波博士擔任、テリー氏のコンモノローを一時大概五頁位の進歩に有之候由、これは先生より講せらるゝにあらず、先生より質問を發し生徒よりこれに答ゆると云ふ仕掛に御座候

政治科の立物一木博士の國法學中面白く御坐候、所論尤で穂積博士と反對に御坐候故、恰も穂積博士の説を駁せらるゝ様に聞きなさを候、一方は右と云ひ一方は左と云ひ適從する所を知らざる如き處、兩々相對し來れば發明する所すなからざるべく候。講義は説明の如く又講義の如く筆記する要なしと思ひ居る中にはや一頁も遅れ候様の事有之候て、頗る困難に御坐候。されど論理頗る明晰にして曖昧なる處なき故尤も解し易く御座候。年齒三十七八。二十年の大學政治科卒業にして、内田康哉、林權助、早川千吉

郎等の諸氏と同時代に御坐候。大學一覽の法科卒業生の部を見れば、社會試験に落第せるもの及第せるもの大牙錯雜して頗る奇觀に御座候例へば二十七年卒業の岡松氏は既に博士として雄を京都大學に稱し居候に、同時期の羽生先生は中學校長たりと云ふ如き奇觀は不尠候が。不思議にも一木氏の同級諸氏は首席の一木氏より末席に至る迄皆社會に成功せる連中のみにて、餘程好運のクラスに御坐候。一木氏容貌端麗なる中一種の威嚴あり、風采頗る揚る。其眼底一種の光あり、常に教場の一隅を睨みつゝあり候、行政整理果して成算ありや否や。要するに將來の大臣候補者たるべく、奥田、安廣、岡田良平等の諸學士と共に椅子を内閣に占むる事あるべきは明に御座候。

大學の經濟講坐の不振なる世間既に定評あり又生の喋々を要せざるべく候、高商校長のドクトル、クラモフスキー氏、寧ろ英文學者たる和田垣博士、氣焔當るべからざる金井博士等中々濟々たる有様に御座候。金井博士低聲よく語る其

講義恰も下手の落語を聞くが如く、社會百方面に亘りて論議盡さる所なし。其の實際を知らんと欲せば其著社會經濟學を讀め、全書は博士の大學に於ける講義より一字一句を増減せざるものなるを以て將來御來京の節筆記の難を免れらるべく候。而し絶海の孤島たる鳥島まで流行に倣ひ候て氣焰吐き、平素は富豪や貴族に媚を呈する大磯の海が俄にやんどどなき方々を一網にヤリ付けんとしてし大氣焰など、命なきもの迄が流行を眞似候様に相成候てはドクトルや博士等諸先生の駄法螺も餘り傾聽の價値あるまじきか否か。序に申上候が京都大學の田島博士も全校生徒には餘り評判よろしからぬよし、一体經濟下手の國民なれば經濟の大學者の出來ぬのも尤も次第なるべく候。

グリフキン氏の經濟學講座にはミル氏のポリテカル、エコノミーを用ひ居候、一時間大抵六頁にて不審の處だけ生徒の方より質問いたす仕掛にて、間々學說の古き處などは別に筆記せしめられ候。純粹の米音にてファートル氏のよりも

分り易く御坐候、全氏の試験は一年に三回有之候様に相決し、且つ一期々々に豫め問題を與へありて、其中より試験問題を出さるゝ様相成居候故、少々勉強さへ致せば無論出來ぬ氣支はある間敷候。

次に申上度は筆記の事にて高等學校にあり候頃は頗る迅速なる様承り居候處、これより來て見れば左程迄なし」の一にて、尤も速き穂積博士の講義も二時間二十頁に有之候（一頁は中版西洋紙即ち御校にて通例用ひ居るノートブックに左右を開け候故、先づ半分丈け書くと思ひなされ候へば宜敷候）て、御校渡邊教授の早き際よりも少しは速に御坐候。而し前申上候通り全博士の口授は尤も工合よく御坐候故、寧ろ渡邊先生のよりも筆記し易く御座候間、一字も洩さず筆記しても差支これなく候得共、繁雜のヶ所などは恐れながら少々節略いたし候故、尙樂に相成申候。民法は二時間に十四頁位に候へ共追々は少しは進む事と相成可申、刑法は二時間に八九頁（これは説明多き故かく少く候）レンホルム氏

は一時間平均二頁半位（筆記時間は二十分位が通例に候）に御座候、要するに御校渡邊先生の口授を満足に筆記し得ば、無論樂にて過され可申候。總じて第五出身の人々は一概に早書の模様にて、何れも何の苦もなくヤリ付け居申候間、今分にてはノート訂正の必要も無之、アンダーラインなど致さぬ者は、只々日々遊び暮すが職業に御座候。

各教授とも發音高くして、よく後方まで聞へ候間、席を爭ふ必要無之、後の方が込み候事なくて却て樂に筆記され候、而し第一あたりの出身連中は常に交代にて前方を占めつつある様に候得共、當方にては左程の必要無之候に付他校出身の人々の間に混りて空席のある所に参り居候穂積教授は時間頗る正確に御坐候得共、他の諸先生は何れもマチ／＼にて何れも大低時間よと十五分位を過ぎて漸く來校せられ候、就中一本博士尤も遅く時には四十分も遅参され候事あり候。

要するに通信を發する頃は大低まだ舊學窓を忘

れざる頃のこととて、多くは先づ新橋の人込にまれ、教授諸氏のエラッーなものに吞まれ、紹介せらるゝ参考書の多きに吞まれ、勉強もせぬ先輩のヨイ加減の駄法螺に吞まれかくして落第し様な心地、胸中に満ち／＼たる際に發するものに御坐候故、通信の真相を穿たざるは尤もに御坐候。小生等も無論吞まれ黨の一人に御坐候故、少々割をかけて御覽下され度候。

人各々目的あり、學者たらんと欲すれば先づ獨逸語に通ぜざる可からず、政治家たらんと欲すれば先づ英佛語の何れかを必要といたし候。而し大學を卒業して學位にあり付くを以て目的とせば無論外國語などの必要も無之候。されば諸氏に於て單に大學一覽の卒業生部に名を留むるに止めんとせば、何の勤むる所なきも不可ならず候、否不可なきのみか隨分請托を以て贅縁を以て巧言を以て令色を以て所謂官海游泳術に達せば、勅任たり親任たる決して不可能の事にあらざるべく候。されば目的の異なる人々に向て、單に一個の勉強法を提起して、かくの如くせざ

經ば大學にありては成功の途なしなぞ申様の愚
試み不申候得共、折角十數年間もしくば三年
間奮勵刻苦せられたる語學を願くば少々は活用
する様いたし置かれ候方便宜よきやも計られず
候。而し第一出身の人が皆俊才と思ひ召され
憚々焉としてこれ驚く様の事ありては男子の耻
辱に御坐候。何も第一出身とて皆々俊才のみと
申譯にても無之、間には小生の如き愚物も不尠
候、換言すれば外國語の甘いお方も一二名は可
有之なれども、多數はこれ我輩同然に御坐候間
は程コワガルにも當るまじく候。かく申せば外
國語不勉強にてよろしと申様に聞ゆるやも難計
御座候得共、決して左様に無之外國語の勉強は
死ぬる程なされ候ても損にはなる間敷きに付、
御心配なく御勉強下されたく、只小生の申す處
は大學でて俊才のみの集合所にあらず、愚物も
あり凡人もありと申す事に御坐候。

もし夫れ成績の點に至りては大に申上ぐべき事
御座候。るは外の事にても無之、よくノートを書
み込み、少々氣轉をさかして答案を書けば、參

考書の一部も見ずとも上々の成績を得、特待生
ともなられ候由、これは小生一家言にては無之
、先輩にて現に諸科の特待生たる人の直話に御
座候。全氏は參考書を讀むは害ありて益なしと
申居候が誠に書物函中に一部の參考書なく只ノ
ートのみに御座候。よくノートを吞み込めと申
すよくの字少々曖昧なれどもこれは先づサアノ
ートの二種も作り、四回か五回讀んだ事を申す
ものにて、氣轉をきかすと云ふ處は少々六ヶ敷
けれど、これは答案の字を奇麗に書き、誤字な
きなき様に注意し、文章の前後錯雜せぬ様に書
く事に有之候由にて候。かく申し候へば何故に
組全体特待生にならぬかとの御質問有之候べき
が、前にも申上候通り何分多數の學生にて、愚
物も尠からぬ事故、ノートの要領を得ぬ向も可
有之、折角要領を得べき人々も要領を得ぬ様に
勉め居候間致方無之候例へば日々アンダーライ
ンをなしサアノートを作り候て研究いたし候ら
は、試験前に通讀二三回にて上等の點を得る
事易々たるべきも、ソレをせぬ處が人間の得手

勝手これに小籾に拘泥せぬ英雄と申候由、小生等の如きも無論英雄になり濟し居申候。もしこれにて甘く行き候時は、早速薄謝にて受験法御傳授可申上、同窓の好、牛肉三人前にて堪忍可致に付、左様御含奉願候。

要するに相當の勉強さへ致せば決してマズキ事あるべき筈なく……勿論幾分受験の際ウイトネスは必要なるべきも……御坐候に付御安意可然候。第五卒業生の不評判は、田舎出のホヤ／＼が都會の熱鬧に吞まれ茫然自失する中に、色々の誘惑物は此際其の細胞中に侵入し、盛に細菌を製造する故、碌にノートも讀まずして受験候事と相成候故にて、必しも語學の罪にては無之候。兎に角義太夫、寄席、落語、講談、芝居、公園、待合等、數へ來れば形而下の快樂は年中到る處に御坐候故、不慣の純朴なる九州人の眼には此上なく面白く、不知不識の間に場なれの先生方に數歩を譲る事と相成申候。小生の如き老骨にては致方これなく候に付マツ／＼緩りと参り候心組にて御座候へ共、若殿方は速に御來學ありて、

第五の面目を高められ度希望に不堪候。

黒葛原先生高飛せられ候由、あはれ左肩あがりし可憐の水滸傳胸名物を逸し申候。後任の松山先生は中々篤學の聞高く、頭腦明敏の評頗る御坐候御。一同の多幸欣羨に不堪候。全先生は高等文官試験の口頭試場に於て、土方寧博士と意見の衝突ありて口角泡を飛ばし盛に博士をヤリ付けられしと云ふ剛の者、講義も活氣不尠義と存上候。法學通論はドーデモヨイと誰も申候様聞及び候得共、決して左にあらず、法學の根底は此處に存し候間、可成精確に可成明瞭な智識を養ひ置かれ候方、後日の爲よろしかるべくと存上候。序に申上候民法條文は無味乾燥にて眠いどの御通信に御坐候得共、後來は非常に必要のものに付、御精讀あらん事を願上候。出來候らは、御諸記相成候らは、後年レーンホルム博士の講義に際して便宜此上なかるべく、さる面倒の事は出來ぬとならば、術語だけは是非／＼諸記必要に御坐候。

序に東都に來りて苦學せられんとする諸氏に一

言申上候。人は説をなして曰く、東都業多し學資を得る何かあらんと、恐らくばこれ痴人の夢のみ。私立中學など頗る多く教師を要する事從て多く候故、成程口もなき事は萬更無之候得ば、これ等は多く射利を目的とする事故、中々約束の月給を受取る事六ヶ敷、大抵十圓の約束のものば成蹟よろしくして毎月二三圓、或は無駄奉公をなす馬鹿を見る事も有之候間、餘程鞏固な決心と強壯なる身体とを有するにあらざれば、自活は到底六ヶ敷御座候。尤も良家のプラベートチュートルとなり、又は軍人の教師となり候様の事出来候得者、此上もなき結構に御坐候得共、かゝる安全にして利益ある口は中々希望者多くして、容易に手に入る事六ヶ敷御座候。雜誌などに筆をとりて収入を得んとする事も面白く御坐候得共、三文文學者など多き當地にありてはそれすら困難にて御座候。而し獨逸語英語など達者にて、新刊の雜誌小説など何の苦もなく翻譯出来候は、二人位の學資を得るは易々たる事に御坐候得共、創作物は頭を苦しめた丈

け原稿料が低廉に御座候。

唐突の義ながら豊田峽東氏はマキヤベリーのプリンスを譯して、これにマキヤベリー及其時代の一篇を附しマキヤベリー經世策と題して普及舍より發行致され候。全氏の健筆は皆て龍南會雜誌に於て諸君の了知せらるゝ所に御座候へ共、敢て小生より贅言を並べ申候必要は無之御座候得共、穩健の行文、殆ど創作をよむが如く、譯し得て頗る妙に御座候。諸君にしてもし同窓に對する好御座候は、よろしく一本を坐右に備へて可也。高橋博士の校閲と桐生學士の補助となりしものにて、殊に英語に堪能なる氏の事故、誤譯なき事は元より明に御座候。東都には書生間に娘義太夫の持て候事、在熊の頃より毎々拜承いたし居候ひしが、來て見れば又格別に御座候。されど義太夫などの流行はサラ／＼浮きたる事より起候にては無之、元を正せばサウンドの研究に御座候由、承り及び候。義太夫研究會は上田博士を會頭とし、龜田二郎氏などを筆頭とし聲音學を志ある面々より成り、

時々御出張相成候てサウンドの研究餘念なく、
 篤學の面影ありくと讀まれ申候。あはれ小生
 如き聲音學に縁なきものも近頃はドウヤラ、サ
 ウンドを研究致し度相成申候、物平を得ざれば
 即ち鳴るとは發音學上の原則に候よし韓文公の
 仰せに御坐候が。ドンナ不平でアンナサウンド
 が出るやら、龜田氏へなりと承り度存居候。鳴
 ると申せば、先日上野音樂學校にてアイノ慈善
 音樂會の催しあり候、ケーベル先生のピアノ獨
 奏あるよし聞きて、鐵道馬車を勞し飛んで參り
 候、色々の曲ありて。後ケーベル先生の奏あり
 、温乎たる其容童子の如く、大學生が心服しつゝ
 あるも無理ならず、何事も知らぬ小生でさへ、
 深く藏めて空しきが如き風丰に接して、畏敬の
 念禁する能はず候ひき。曲は流石有名な巧手と
 て、はとく此世のものならぬ心地いたし候、
 七時頃冬のシーズンを語る様な月を負ひて大通
 に出づ。二頭立の馬車音樂會販りの令嬢を乗せ
 て萬世橋の方へ走り申候、これぞ都なんめると
 誰やらの句をモシリて。

二頭立の馬車奥深ふ紅葉かな。
 御一笑可被下候。次便には少々他分科大學の通
 信も可申上、先はこれにて擱筆仕候。早々頓首。

(木南生)

○在寮法科生懇話會

學寮の揭示場に人の山が出来て居るので、行つ
 て見ると、法科生懇話會の豫告だ。して其の豫
 告が、實に仰々しい者だ。一方の黒板一杯にい
 模擬國會、政府提出地租繼續案、と記されてあ
 る。而して、一方の壁には、筆大に内閣各大臣
 の役割の書いた紙が貼付けられて居る。
 滿案を刮目せしむる這個の大仕掛の振出しは、
 頗る有功であつた。議會開會の當夜となつて、瑞
 邦館には一部生は無論、他の部の諸子も、ひし
 くと押掛けられて、吾が輩が入校以來、實に
 是れ空前の盛會だ。時刻どもなつて、各大臣も
 着席、政府反對黨と、政府黨との席も定まつて
 、議長は開會を報じた。所謂未來の大臣と、所謂
 未來の議員とが空論横議の活劇の幕は今や切つ

で落された。一寸此の間に言へて置く事がある。如何氣取つても、青二才はやはり青二才だ。獨乙語や英語で、毎日鍛はるゝ身は、當時政治界の問題がどんなか、只新聞のへば論說で窺ひ知る位の者だ。然るに今度、急に大臣に任命され、議員に撰ばれて、國政を料理する位置に立つた。さう大變だ、大臣連も議員連も、古新聞を引き出して、急激の調査。反對議員に反對の意見なく、政府側にも賛成の意見が求むるに困難だ云ふ願ひ。漸つとの事で、開會の數分前に調査せない調査が出来たらしい。勿論事實と、想像否捏造の打ち交した議論を懷いて、大臣も議員もすましきつて着席した。中には捻るに髻さとかち顔の御方も見受けた。議案は地租繼續と標榜して居るが、地租繼續の事を中心として、議論は海軍擴張にも及ぼうと云ふのだ。扱て愈々開會となつた。吾人の議會は、決して議場法とかなにか云ふ者の制縛を受ぬ。只自由行動を是れ主として、議長が發言許可をなすと云ふが唯一の規則だ。先づ大藏大臣御自身に豫算に關

する大体の説明があつた。續いて質問がある。豫算に遺算あり、暫時休憩、豫算改正と云ふ、滑稽劇の一幕が終りて、愈々討論に移つた。各大臣各議員交々演壇に登りて、「本大臣へ」「本議員へ」と、是れこそ臍の緒切つて始めて、自ら大臣、議員呼はり。何んとなう耻かしそうなきまりの悪い口振り、側の見る目も何んとなうさまりが悪い。御互に急所は避けての攻撃反駁。一方甲を説けば、他は乙を論じ。怪我あつては御互の爲めならずと、用心をささ怠りなき有様、流石は一國の大政治家と感服の外はない。議論進み進んで、頗る綿密な誤りの多い序述的の辨もあれば。又粗大、抽象的な政治學講義風の議論も出る。大聲疾呼、野次馬的叫喚の大演説もある。罵詈の言、諷刺の語、要するに、皆敵にかすり傷より以上は負はせないを主眼とした。甲論乙駁、益々盛んとなつて議場の熱度は愈々高まつた。龍掣虎擲の大活劇、今眼前に一幅の活畫と現出して、見る者も心の躍り立つ思ひ。激昂と敖岸と摯拗との争は、天下何の處にも、

決して穩和なる結果を見る物でない。政府も反黨も、只初めの意見のまゝの一本槍だ。臨機應變、其の宜しきに從ひて、相互に解融して國政を調理するなどの念は、毫頭彼等の頭にない。邦家の存亡何んぞ問はん、吾人の行動は只空論横議のみで、双方どしく、向ふ見ずの盲進猪突。はては議場に大多數を占めたる反對黨は、政府不信任案を、議決し様とした一刹那、政府もさるものなり、太詔煥發、議會は開散を命ぜられた。

例により、茶話會に各々氣焔の殘片を、吐きつゝして、散じたは十一時過ぐる頃であつた。

寢んとす、龍田山、松籟稷々の聲、常よりも高きに似たるは、健兒が氣焔の余韻か。實に今夜の會は盛んで、滑稽で、嗚呼面白かつた。

時維明治三十有五年、秋王の十月二十五日。

當議會の役割は左の如きものであつた。

總理大臣 佐 藤 適君 議長 河野龜治君

外務大臣 咲花一二三君 反對黨院內總理

內務大臣 小島祐馬君 小野彦三郎君

大藏大臣 花田大五郎君
海軍大臣 田中 謙一君
陸軍大臣 合志 淵藏君
文部大臣 齋藤 三郎君
逓信大臣 久原 省己君(妄言多罪。某生)

○三部三年濱崎敬明君逝く

空には悲しき秋の色あり。地にはさびしき落葉の聲あり。

滿天、滿地、世は寂たる秋に入りて、さなきだにうら悲しき時、わが同窓の友濱崎敬明君は、とこしへに瞑目しぬ。

あゝ、君逝けり。滿心の功名、生きては事をなさんとし、死しては名を後世に残さんことを希ふ。しかも、うの滿腔の抱負や、多年の修養や、冷やかなる死の手に抱かれては、今はた何するものぞ。

青春の人、學半バにして逝けりと聞かば、知ると、知らざると、何れか涙を注がざる。肥後天草は、君か搖籃の立てるところ。

濃厚なる人なりき。篤實なる人なりき。今や、どこしへに長き眠りにつきぬ。

あゝ、天は悠久にして極みなたに、人生の須臾なる、まことに朝露にも似たらずや。一榮、一落、繁多なる人生も、束の間の夢に過ぎず。思ふて死に至る。涙、先づ、泣然として下る。

しも月。黃菊、白菊、美を庭前に競ふ。しかも、白葩、黃葩、徒らに、はかなき運命の前に翻るなり。

その、散りゆく花びらと共に、君は、時を待つたで、すでに、はのぐらきよみの人となりぬ。

手を拱きて、靜かに君を忍べば、風あり、悲しき音をたてゝ、わが窓邊を訪る。

あゝ、わが濱崎敬明君は逝きぬ。
悼しきかな。

(かすを)

○諸君の一讀を煩はす

●龍南會雜誌は、わが七百の健兒の思想録あり。七百の健兒が、抱負を述べ、氣概を談じ、學餘の研鑽を公にする、貴重なる雜誌なり。粧飾的

第十二

のものに非ず。委員の手習草紙に非ず。又五六の人の獨占物にも非ざるなり。その振ぬど、振はざるとは直に以て、龍南會の盛衰如何を卜すべきなり。わが七百の健兒の、內的活動の如何を知るを得べきなり。

●多年の修養と、研鑽とを以て、各得意の題目に對して、論評を試むるは、學府にあるべき人の、快事とする所にあらずや。鬱勃たる滿腔の抱懷を吐露し、侃々諤々の論議を公にし、或は心中の反問を漏し、胸裡無弦の琴線に觸れたる美感を叙するは、青春の時代に於て、最もはなある事に非ずや。活氣のあるところ、希望のあるところ、主義の存するところ、論議の文を草するは、自ら止むを得ざるべし。然ゆるが如き情、溢るゝばかりの涙を注いで筆を駈るは、青春の血湧く人々の、抑へんとしても、抑ゆべからざるものなるべし。

●滿校の生徒、數に於て殆んど七百、少しとなさず。法、文、工、理、農、醫等、あらゆる方面に志せる人々を包有す。實に其内容に於て、全

『アアなるものに非ず。然るに、わが龍南會雜誌上に於て、此等の多方面に志せる人々の、片影をだに認め得べきや。異なる目的を有する人々の、反映を認め得べきや。多士濟々たる龍南會にして、其機關雜誌の、何が故に、しかく振はざるや。何が故に、しかく光彩を放たざるや。

●わが龍南會雜誌は、堂々たる高等學校生の手になるものとして、天下に誇示するに足るべきか。わが五高の面目を、名残なく發揚するに足るべきか。吾人は雜誌不振の聲を、耳にするや久し。然も一人の立て、椽大なる筆を揮ひ、誌上に騁馳するものあるを聞かず。依然、不振の聲は、反響なくして過さぬ。委員素より、責なしとせず。然れども、雜誌は委員の雜誌に非ず。その振はざるは、やがて會員の振はざるしるしならずや。委員、數に於ても僅かに五名。如何にその涸枯せる頭腦を絞りても滿紙を填むる原稿を作る能はず。會員にして惰眠を貪り、覺醒するの期なくんば、不振の聲は、到底免る可からざるなり。

希望あらば、主義あらば、活氣あらば、何ぞを披瀝し、吐露せざる。人生に於て、最も活氣あり、最も氣概あるべき青年にして、何が故にしかく閑息せるや、死滅せるや。

●三年輩はす、鳴かずとや。修養時代に於て、意志を發表する必要なしとや。げにろは巧なるフオールヴァントなり。由來三年輩はす、鳴かずとは、死せる平和の裡に呼吸する人々の、唯一の楯となり易し。彼等はこの好箇の隠れ場に潜みて、乾燥なる、デル、デス、デム、デンの復習に余念なく、無味なる筆記の訂正に齷齪たり。主義あるに非ず。活氣あるに非ず。試験の奴隷となり、點數の爲に左右せらるゝ、怯懦なる青年なり。自己を没却し、勉強の本義を曲解し、一種憫れむ可き機械となり了れるなり。

●滿校擧つて、氣慨なき、元氣なき、主義なき、平凡なる一團體たる間は、振はんとしても又得べけんや。彼等の多くは、雜報以外に、一頁だも、半頁だも。否一行すらも讀まざるなり。而して漫然口を開き、紙數の多寡によりて、輕々

にも雜誌の價值をあらわす。兎に角彼等には、一寸の絹よりも、一尺の木綿が尊きなり。無論、吾人はわが雜誌を以て、一寸の絹に比する能はず。されど、吾人は材料の精撰に、一方ならず苦心すること多し。その内容さへ宜しければ、決して耻づる所なきなり。漠然、紙數によりて價値の如何を云ふ、愚や憫む可し。

●學年改まりて、新に三百の諸君を迎へたる時の殆んど、東北地方より、西南地方に至るまで、各中學の粹を絞きたるを見て、吾人は竊かに望を囑したりしも、前號に於ては、その玉稿に接する能はざりき。吾人は、諸君が暫く沈重の態度をとれるなりとし、本號に於ては必ず、見るべきものあらんと豫期せしに、吾人が、滿腔の歡びを以て迎へたる諸君の寄稿は、一篇だにあらざるなり。吾人は絶望せざる可からざるか。諸君の中學時代に於て養ひ來りし活氣は、なほさめざるべし。而して、早くも龍南の、死滅せる平和の裡に眠らんとするか。

●單に、一雜誌部の榮枯といふなかれ。事は、

わが龍南會の消長に關するものあり。既往は答めず。願くば諸君、沈靜なる、寂れたるわが紙上に、その椽大なる筆を揮ひ、以て挽回の策を講じ、不祥なる雜誌不振の聲をして、過去の中に埋却せしめよ。

何等の希望なき、主義なき、活氣なき青年たる勿れ。蠢々乎として生理的余命を有するも、已に精神的に死せる青年たる勿れ。

諸君、一片稜々の氣あらば、吾人に一瞥を與へよ。徒らに袖手傍觀して、我事了れりとするは、諸君の能事にあらざるべし。

不知不識諸君の賢明を汚して、一文を草しぬ。反響なくして過ぎざらんとを望む。吾人は諸君の投稿を待つこと切なり。(せ、か)

○野球につきて

數年來衰へに衰へ來つた我が野球界は近年に至つて實に寒風枯林、寂寥を極めた。徒らに、往年玄海の濱で、中國兒の膽を寒からしめた、先輩の壯圖を思ふて、心あるものは今昔の感に堪へ

す、蓬々たる運動場裡の雜草に、無限の嘆息を吐きかくるのみであつた。しかし、一衰一盛は宇宙の大真理である。かく迄に衰へた野球界も、いつかは又、否遠からず、百花爛熳の期節に遭遇するだらうとは、失鑿を極めた野球界に微かに残つた光明であつた。それからぬか、昨秋來、春の始めは、緑の木の芽のかすかに見らるる様に、運動場裡に、少しくバットの響が聞は初めた。是れ藤子の飄々の聲よりも細い野球界の聲である。しかし、此の細い聲の中に、前途の望の洋々たるを告ぐる、微妙の音がある様に吾等の耳に感じたのである。凡て物の衰ふるは忽ちだが、興るはまち遠い程、遅々たるもので、芽の出づると同時に花は咲かぬ。昨年は一度冬枯に遇ふた、野球界に、漸々春風の吹き初めたのである。しかし早成を望むは無理だ、只時の保育を待つの外はない、と吾人は滿腔の希望を來ん秋に傾注した。さて今や其の秋となつた。龍南の天地は新舊の大交代を行ふて、日本全國の殆ど凡ての地から新來數百の健兒を迎へた

。我が野球界も此の大改新期に當りて、大飛躍をなしたであらうか。

思ふに、天は人間の希望と云ふ者を、満足させない様につとむる者らしい。今度二三名手が來ないではないが、吾人の期待を満足させないのである。併し新來の珠手は、嘗つて中學時代に盛名を遠近に振ふた士で、其の老巧と、熟練と熱心とに於て、龍南野球界に一段の活氣を添へたのは、吾人の忻喜にたぬない處である。吾人の希望は満足はされなかつたが、しかし、前途の大光明の近いた事は去秋の比でない。憂々たるバットの聲、察々たるミットの音を、日々に聞き、運動場裏に暴威を振ふた雜草が、天の冷かなるのと并せて、野球子の攻撃に、日々に衰へ行く様を見ては、吾人は快哉の叫を、發するを禁じ得ない。抑も、吾人が野球技の一衰一盛に、しかく喜憂する所以は、外ではない。其の敏活と、大膽と、而して勇氣とを要する上から見て、精神の修養上頗る功果のある者である。且他の運動遊技の如くに、各人單獨の行爲で、此の技は

能く演ぜらるるものでない。必ずや、各人共同一致相和し相依り、相助けて、行かなければならない。此の點からして吾人は此の技が、共同的精神を養ふ上に於て、益あるを信じて疑はない。又此の技は其の雄大なる點で天下他に比肩すべき遊技はあるまい。青空の下、廣濶なる場所、輝々たる太陽の光を浴びつゝ、戦が始まる。攻撃者が一壘より二壘、二壘より三壘と突進奮撃する守者追ひ守りつゝ、迎戦する球は目の眩む様に、彼方に飛び此方に射る或は倒れ或は贏、一髪の間を争ふきはどい戦があるかとすれば、又憂然として打手の持つ長棒に響かあると、球は鳥の如く飛んで雲を分けて入る、かと思ふと急轉直下、外野手の脳天にかけて射下る、人撃たるか、球逸するかと見る間に、さつと音して球は掌中に止つて、平然彼は微かに笑つて居る、と云ふ様な、人の心をなんどか、人間界外に引きだす様な、一種神爽たる感を、吾人に與ふる事がある。その上、此技は凡ての時平靜と沈着を失はずに、其の陣立ては、肅然整然たらな

ければならぬ、行動は堂々、悠々たらなければならぬ。此の如き點からして、吾が輩が此の技は雄大なりと云ふに於て何の非があらふか。かくの如く、雄大にして共同的精神、大膽敏活の性質を、養ふに功ありて、而して其演技が種々なる規則に律せらるゝ爲めに、頗る複雑なる他に求め難き一種の興味を覺えしむる等の上から見て、吾人は此の遊技を、殆んど理想に近い遊技と云ふを憚らない。斯の如き遊技が何故に吾が校學生の興味を呼起すことの少ないか、吾人は實に不思議の感にたねない。

凡そ、此の種の遊技は、団体と団体とで演ずるので、其の勢、此の遊技のある處では其の技の最も巧なる一團と云ふ者がある。而して、此の技が殆んど其の一團の、専有なるかの様の状況を呈する事も、屢ある事である。勿論此の一團の人は其の技の達者である、故に其技界の中心となり、時にとりては、其の技界を代表するの任があるだらふ。しかし、此の一團ありて此の技界でふ者があるでない、此の技界ありて此の

●團があるのである。もしかくの如き誤解が吾が龍南の野球界にありでもしたならば、其は實に憂ふべき事である。一日も早やくか様の誤解を去るべきだ、龍南好球の士よ、新と舊とを論せず、技の巧拙を問はず、此の全國にも稀な立派の運動場を、雜草の跋扈に委せないで、我が野球界をして往年の元氣を再興せしむると共に、這個の雄大な、共同的な遊技によりて、趣味を得るの側、秀美な品性を養い、身軀を練鍛し、吾が野球界をして、吾が校の元氣と、風氣との、根元中心たらしめようではないか。而して我が同窓の未だ野球を知らざるものをして、此の技によりて、限りなき趣味を得得し、貴重なる修養をなさしむる事を得るに至つたならば、實に愉快ではないか。

(好球子)

○秋窓鴻言

●世の中に自由を失つたものはと憫れなものなく又己の意に適せぬ事を爲すより苦しいものがあるまい、之に反し自分の好尚を趁ひ嗜好に従

つて勉め勵むほど面白く愉快なものはあるまい、随つて其の進歩も著しく其の効果も多いのだ。

●吾人は常に「樂天的に勉強せよ」といふ、即ち學問の味噛み出せ荀子の所謂好を一にせよといふのだ、苦學といふのは單に身体上の事で精神は何處までも樂學でなければならぬ、古人が清貧に安じて苦學即ち身體の苦艱を厭はあかつたのは精神の快樂の夫れ以上大なるものがあつたからである、處が今日の青年わけて學生は果して樂學して居るのであらうか、心の満足を得んが爲めに勉強して居るのであらうか。

●兎に角吾人學生の最も研究すべきは如何にせば自己心靈の要求に従つて勉強し得るや如何にせば學問に趣味を有するに至るやとの問題だ、併し其の趣味を解せんとするにはどうしても勢い多く勉強せねばならん即ち時間が要る、故に吾人は如何にせば勉強(愉快に)する時間を最も多く有し得るやといふ問題に歸着してしまふ。

●此の問題を解する方法はいくらもあるであらうが先づ第一に講義の筆記は廢めねばならぬ、

それはドウ考へて見ても馬鹿らしい、此の文明の世印刷術の盛なる時に著書の多き時に速記の藉古までせねばならぬとは情ない事である、吾人は一時間筆記に手の勞るゝを覺て腦裡一點の智識をも留めぬのみならず歸りて更に之を訂正補記せねばならぬ、で迎も東西の參考書などば就て博搜する暇はない、この筆記の無益なことは早くより分り居るべき筈なのに今尙行はれ居るのはドンナ譯であるか了解に苦しむ。

●其の次は豫習は成るべく廢せよといふのである、見よ今日吾人凡庸の徒は豫習の爲めに多大の時間を費せしのみならず多量の精力は日日悲觀的に失はれ居るのである、自修室内頭を抑へて字書と引引せるときは多々豫習の時間に相違ない、彼等は果して自動的に樂天的に勉強しつゝあるのであらうか。

●今日學生の實力の往時に比して低落せるは明かなる事實だ、識者は之を學課の夥多なるに歸し其の課業を減じて時間の猶豫を與へ以て大に自動的研究の精神を獎勵せんとといへる噂は吾人

之を耳にしぬ、併し課業を減せることは到底行はれぬらしい、然らば吾人は尙今日の狀態に於て進むべきか。

第十八

●豫習ちやどて決して悪いものではないが唯復習する暇を奪はるるから廢めたいのだ、又教授先生に於ても豫習に對する督促の如く爾かく復習に對して厳しくないのは實に今日學生實力の増進せざる一因ではあるまいかと思ふ、凡そ吾人は毎日時間にも精力にも制限があるのに豫習も復習も立派に仕上ぐるのは少少六ヶしい、假令其の餘裕があるにしろ今の有様では勢豫習に其の多くを費して復習の如きは、加減に過ぎずのは當り前の事だ、況んや用事もあれば運動もせねばならぬのに尙ほ効多き復習をすてて勞多き豫習に勉むるのは魯直なる篤學者の外あまり多くはあるまい。

●斯くの如くにして課業は日に日に滔滔として進み行く試験の關門に至りて始めて呆然自失頭は痛む卵は要る、遂に試験は學生を侮辱するものなりなどと妙な斷案に到着するのだ、若し完

全に一日の課業を復習して之を咀嚼了解し、而して餘暇あらば明日の豫習をするとか又は參考書の研究でもしたらば一日の勞は一日の力を加へ、勉勵研精に従つて學問の趣味は必ず津津たるものありて落第の悲運に接するものの如きも今日の半に減するであらう、しかも斯くの如きは固と是れ勉學の常徑ではないか。

●人は今日の學問は形式的なり注入的なりと云へど吾人は決してしか思はざるべし若しも綽綽として自動的研究をなし得る餘裕だにあるならば、あゝ今の學生は習ふを樂んで學ぶにあらずして問はるゝを恐れて學ぶのである、是れ果して勉學の眞意なりや所謂高等教育なるものゝ眞義なりや。

今日小學校の教授法の如きは煩瑣に亘る程精密であのに反し進める學校に於ては随分難駁な點もある様に見受けらるゝ、是れ吾人の人格を重んぜらるゝゆゑであらうけれども生徒は矢張り生徒だから少し舵の取り様では随分なまけもあるが又勉強する様にもなるものだ。(日東生)

○斷りがた

各部記事、學寮記事、紅葉會詠草など、本號に載すべきものにして、紙數に制限せられ、次號に譲れるもの多し。又小松宮殿下の御臨校、提灯行列の記事など、原稿締切後なりしを以て、遺憾ながら、次號に詳載する事となせり。諸君、之を諒せられよ。